

「びわこ国際スポーツセミナー2008」

海老島 均¹⁾ 小笠原悦子²⁾

Biwako International Sport Seminar 2008

Hitoshi. EBISHIMA & Etsuko OGASAWARA

Abstract

On July 22nd 2008, an international seminar was held at Biwako Seikei Sport College featuring two prominent sport sociologists, Dr. Steven Jackson from the University of Otago, New Zealand and Dr. Chris Hallinan from Victoria University, Australia. Dr. Jackson is the President of the International Sociology of Sport Association and Dr. Hallinan is the Vice President of the same association. Special lectures were given by these two world class scholars on “sport and national identity in globalizing world”. Both lectures are summarized in this article. In the last chapter, the common viewpoints from both presenters were examined, and an extended discussion was carried out in the context of a sociological framework.

Key words : Globalization, National Identity, Sociology of Sport,

1) 生涯スポーツ学科, 2) 競技スポーツ学科

はじめに

標記の国際シンポジウムは、本学の国際交流委員会と学術委員会の協働作業によって実現した。2008年7月27日、28日に京都大学で開催される国際スポーツ社会学会京都大会出席のために来日する国際スポーツ社会学者を招いて、グローバル化社会の中でのスポーツに関して先端の研究成果、諸外国の事情を知る機会を持つという目的を掲げ、計画はスタートした。

幸いなことに、国際スポーツ社会学会会長、ニュージーランド・オタゴ大学のスティーブ・ジャクソン教授と同学会の副会長オーストラリア・ビクトリア大学クリス・ハリナン准教授がシンポジウム参加を快諾してくれた。シンポジウムの副題を「グローバル化社会の中でスポーツ、ナショナル・アイデンティティを考える」とし、2008年7月22日、13時から15時にかけて本学、第2講義棟大ホールで行われた。当日、本学学生、教職員また近隣大学関係者で満員となった会場で、映像や写真を交えて、出席者を引き込むような興味深い講演が両氏によって展開された。通訳を担当してくれた土井氏は、ニュージーランド、オーストラリア両国特有の社会的背景を持ったトピックにもかかわらず、微妙なニュアンスまで適切な日本語に置き換え、参加者が講演の内容を理解するのに大いなる助けとなったことは、シンポジウムの成功の要因となったといえる。以下に両氏の講演の要旨をまとめ、内容に関して総括を試みた。

1. スティーブ・ジャクソン教授講演

『ニュージーランドのハカ-グローバル化社会の中での国民的スポーツの儀式-』要旨

ハカ（ニュージーランドの先住民族であるマオリ族の踊り）に関連する諸問題



(1) ハカと暴力

ハカはもともとマオリ族の儀式において踊られる神聖なものであったのに、戦闘性が強調された攻撃的なイメージが形成されてしまった。例えばニュージーランドのラグビーチームが試合前にハカを踊ることによって、必要以上にお互いのチームの敵対心をあおる結果になっている。ニュージーランドにおける高校ラグビーの試合前に、両チームがハカを踊り、顔と顔がぶつかるぐらいまで接近した結果、結局試合前に喧嘩になった例がある。

また、国代表であるオールブラックスにおいても、2006年に新しいハカが導入されたのだが、今までのものと違い、非常に攻撃的で、最後には喉を掻き切るジェスチャーまでである。このジェスチャーに関してはニュージーランド国内のラグビー関係者の間でも「やりすぎ」との声が上がるほどであった。

(2) ハカと女性

ハカがフィーチャーされているフィアット社製の車のCMの中で、女性がハカを踊るシーンが使われているが、マオリ族の中で、女性がハカを踊ることはほとんどないという事実から、文化性が歪められているといえる。また映像に登場した女性たちは、正式にハカを踊るトレーニングを受けていないことも問題である。

(3) ハカと商業化

ハカは異国情緒が漂うエキゾチックなものであるので、広告会社などが、こぞって使い

たがる。また広告だけにとどまらず、アメリカの映画で、アメリカン・フットボールのチームがハカを踊るとシーンまでがフィーチャーされている。誰もマオリ族との関係がないわけで、エンターテインメントとしてハカが利用されているという表現が適切かと思われる。ニュージーランドのワインのラベルで、ハカの踊り方をイラスト化したものがあるが、ハカは本来、アルコール系の飲み物と関連付けて表現されてはならないものである。ハカを広告で利用するのはニュージーランドの企業だけではなく、先に紹介したフィアット社や日本のトヨタ自動車など外国企業も積極的である。ハカを踊る時、マオリ族が目を見開き、舌を突き出すポーズは、自然界と自分とのつながりの神秘性を表現している。なぜならば、目は外界への窓口であり感情や精神性を表しており、舌は、言葉を発したり、物を食べる際に重要となってくるからである。フィアット社のコマーシャルで、小さな男の子が無邪気に舌を出すシーンは、この神秘性を重んじるマオリ族の文化に対して侮蔑に値する。

ここ10年で最も物議を醸し出しているのが、アディダス社のCMにおけるハカの使われ方である。ハカを創り出した部族長の子孫が、アディダス社を相手に150万ドルの賠償を求めている。部族の固有文化が商業的に利用されたという観点が争点だが、個人が文化を所有できるかという点に加えて、マオリ族の表現方法が人種差別的な色合いがあったことも問題視されたのである。マオリ族のタトゥー、「モグ」は線の一つ一つに家族のルーツにまでさかのぼる物語が込められてある。しかし、こうした背景を抜きにグローバルな形で伝統文化が表現されたときに、マオリ族の文化が原始的で野蛮なもの、暴力的なものという印象で伝わるおそれがあるのだ。

(4) ハカ、さらなる文化的複雑性

ハカの歴史において、ナティトハという部

族の長が1800年に北の島から南の島へ侵入したエピソードと切り離せない。その際に、南の島のある部族が大量に虐殺されたのだ。この部族の子孫たちは、現在オールブラックスのハカで使われているカマテハカが踊られると、悲劇が思い起こされるとして不快感を示している。同じマオリ族でも、受け取り方がまちまちで、簡単に線引きできないという背景もある。

(5) まとめ

ハカという伝統文化がスポーツというコンテキストで用いられる過程での、様々なグローバルそしてローカルな観点での論点を紹介したが、今後、以下の問題点に関して継続して検討していく必要がある。

- 1) ハカは本来フェアプレーを促進すべきものであるか？
- 2) ハカがマッチョ文化と結合し、女性を排除していないか？
- 3) ハカが暴力を誘発するものになっていないか？
- 4) マオリ族の文化が、グローバル化社会の中で搾取されていないか？
- 5) ハカをめぐる複雑な背景が部族間の対立を引き起こしていないか？

2. クリス・ハリナン准教授講演

『オーストラリアの文化的多様性とアイデンティティ』の要旨

(1) アジアの国としてのオーストラリア



ナショナルAチーム、Bチーム、そしてプロのクラブチームに至るまで、オーストラリアのサッカーチームはすべてアジアサッカー連盟に加盟している。オーストラリアはアジアに属する国なのだろうか？ オーストラリアのサッカーチームはアジア連盟に加盟すべきなのか？ 実際アジアの境界線がどこにあるのかという問題も論じられた。グローバル化が進んだスポーツの世界において、より複雑性が増しているといえるであろう。

(2) スポーツとナショナル・アイデンティティ

オーストラリアは、長い間、スポーツとナショナル・アイデンティティをつなげる考えを拒絶してきた。法律的にオーストラリアが一つの独立国となる前に、ナショナル・スポーツと呼ばれるものでアイデンティティを作るべきだと主張する人もいた。オーストラリアはもともと非常にイギリス的色彩の強い国で、スポーツもその影響を受けている。オーストラリアでクリケット、ラグビー、サッカーが人気があるということが状況を反映している。しかし近年人気のあるサッカーを例にとると、オーストラリアという国の統一性と、文化的多様性が同居している。多民族国家の、個別の民族性を象徴する役割をスポーツが果たしている側面もあり、国内のサッカー・リーグにおいて、民族の違い、ルーツの違いがチームの違いとなって表れている。

(3) 国内サッカー・リーグ

1977年にサッカー・リーグがスタートした際に、固有の民族性を排除しようとした。しかし多くのクラブは、ギリシャ系、マケドニア系、クロアチア系など、民族的アイデンティティがベースとなって設立されており、こうした民族的アイデンティティの発露としてサッカーが捉えられてきたので、大きな議論を呼んだ。オーストラリアは多民族国家であるが、サッカーの試合でギリシャやイタリア

やクロアチアの旗が堂々と振られる状況に不快感を示す人たちも少なくない。

(4) 民族的他者性に対する嫌悪感や恐怖感

シドニーのクロヌラ・ビーチで起きたイギリス系の若者と中東系の若者の対立によって引き起こされた暴動は、公共の、それもレクリエーションの場で起きたことで特筆すべきものである。中東出身の男女にとって、年齢を問わずしてビーチには安心して行けないという状況になった。

オーストラリアには2大政党があるが、政党間の駆け引きにおいて、多文化主義の支持や棄却が利用されることも状況を悪化させている。

(5) ヒュンダイAリーグ

ナショナル・リーグが再編された形でスタートしたヒュンダイAリーグでは、政治的アイデンティティの保有、政治的主張、民族を想起させるチーム名を禁止することが規則に書かれている。また商業的成功を目指し、スタジアムも家族連れが安心して来られるような雰囲気を目指した。これに対しては批判もあって、「健全化」された国際化はある意味での無菌状態、骨抜き状態ともとれる。ドイツやオランダのような、テーマパーク化された国際化であるという指摘がなされている。

(6) まとめ—グローバル化社会の中での多様性—

バーバ (Bhabha) は1994年には「グローバル化の進展は、グローバル化しつつある国が内なる差異、つまりローカルレベルでの多様性と再配分（資産の再配分によって不均衡をなくすこと）の問題や少数民族の権利や代表権にいかに対処しているかによって評価される」とグローバル化社会における文化的多様性に対する取り組みの方向性を示した。しかし彼は2004年には「国民的文化におけるローカルリティは、それ自体統一された一元化さ

れたものではないし、外側のものに対して、単純に他者として見られるものでもない。外と内の問題は、新参者を政治的統一体として受け入れたり、全く違った価値観を創り出したりするハイブリッド性が生まれるプロセスであり、必然的に、政治的対立の無人の領域を創り出したり、政治的代表権の予測のできない勢力を創り出すことになる」と大きく転換したパースペクティブを示している。この10年間の推移を象徴的に表しているといえる。

3. 講演会を総括して

国際スポーツ社会学会の会長および副会長を迎えた非常に貴重な機会となったシンポジウムに参加した学生、教員また近隣大学関係者は、両氏の熱のこもった講演に聴き入り、活発な質疑応答が展開された。

それぞれの講演の中で、ニュージーランドとオーストラリアにおけるスポーツが、いかにグローバル化社会の影響を受けているか、両国におけるナショナル・アイデンティティがどのようにスポーツと関連して形成され、グローバル化の影響の中で変容を遂げているのかが、映像や写真とともに、具体的に説明された。

スポーツのグローバリゼーション研究における第一人者、元国際スポーツ社会学会会長であるイギリス・ラフバラ大学、マグワイアー教授は、「グローバルなスポーツ文化の出現またはスポーツのグローバリゼーションに向かって、差異の減少（Diminishing Contrasts）と多様性の増大（Increasing Varieties）という相反する流れが同居しているのではないか」（Maguire, 1999: 207-216）という見解を示した。ジャクソン教授の講演の中で話題となったマオリ族の伝統の踊りであるハカが、ラグビーというグローバル・スポーツ（ニュージーランドでは国民的スポーツと表現される）に使われ、試合前に緊張感を喚起させるビジュアルとしてメディアで寵

児的扱いを受け、その暴力性や相手に対する挑発といった元来の意味とは全く異なるコンテキストで使用されている状況を、ジャクソン教授は「民族文化の搾取」であると指摘した。多国籍企業と呼ばれる地球規模のマーケットを席卷している企業やマス・メディアが、民族やローカリティに限定された固有文化を、その希少性、差異化された商品価値ゆえに最大限に利用する図式は、固有文化の独自性を侵害しているというメッセージがそこには含まれている。サッカーなど地球規模のスポーツの場合、その運営自体がグローバルで均質な状態を創り出しつつあるといえるが、企業のグローバルに展開されるマーケット戦略が、固有文化の背景を無視した新たな市場における均質的な意味を与えつつある。その均質化されたメッセージゆえに、新たな問題（ハカと女性の問題、ハカと暴力）を引き起こしているという構図もジャクソン教授のハカをめぐる議論から明らかになった。

ハリナン准教授の講演では、サッカー・リーグの変革と多民族国家としてのオーストラリアの変容および文化的多様性の変質について焦点が当てられた。当初は、多民族性を許容することが全てであるように理解されていた文化的多様性だが、複数の異文化から新たなハイブリッド性も兼ね備えたナショナル・アイデンティティが出現し、その創出に関する政治的駆け引きの存在、アイデンティティのシンボルとしてのスポーツを取り巻く環境の複雑性が議論された。

再編された国内サッカー・リーグは多くの企業を巻き込んだ商業的収益やエンターテインメントを目指すために、民族性が排除されているようである。それは脱文化的背景による均質性の出現という、グローバル化の典型的プロセスとシンクロしている。こうした均質性の出現をハリナン准教授は、「健全化」された国際化、しかし一面では骨抜き状態、無菌状態であると揶揄した。

しかし、オーストラリアにおける文化的多

様性の意味づけには政治的に複雑な背景があり、異なった意味づけのハイブリッド性の出現とつながり、政治的対立の道具として扱われて無人化 (unmanned) した領域や、予測のできない新勢力の出現といった、予断の許されないものであることが指摘された。

グローバルなスポーツ文化、またはスポーツのグローバル化での過程は、マグワイアー教授が指摘したように相反する二つのベクトルが絡み合った複雑な過程である。そこに、ジャクソン教授が指摘したような脱文化的背景にともなう現代の社会的ファクター間で引き起こされる確執、またハリナン准教授が指摘したように、異なる文化がグローバル化社会の中で表面的には一元化されたように見えるが、実は今までとは全く異なったコンテキストが出現していたり、様々なファクターが入り交じったハイブリッド性の創出といったような新しい地平線が出現している。「トランスナショナルで、トランスローカルな現象が、ますます拡大化し複雑化する社会的紐帯の中でおきている風景」(海老島, 2006) である複合現象としてのグローバルなスポーツ文化、またスポーツのグローバリゼーションのパーспекティブに関してより良き理解を得る意味でも貴重な講演会となった。

さらにもう一つの主題であるナショナル・アイデンティティに関しても、今までの国家を主体として考えるスポーツとナショナリズムの関係性だけでなく、そこに参加する人々の文化的背景、参加形態やコミットメントの度合いにより、様々な物語がよりグローバル化された社会の中で展開されているという側面が、両者の講演の中で強調されたと考える。先住民を包含した形でネーションとして形作られたニュージーランドで、ナショナル・スポーツと目されているラグビーの国の代表チームのシンボルとして先住民の文化 (ハカ) が用いられている様相は、重層的なナショナル・アイデンティティの象徴といえるであろう。さらにそこに、多国籍企業の影響力が加

わり、商品化されたナショナル・アイデンティティとしての問題、文化の独自性と相容れない商品化・コード化されたアイデンティティという性質も表れてきたのである。

歴史上、政治・経済的また文化的理由で多く移民を受け入れてきたオーストラリアでは、スポーツとナショナル・アイデンティティの問題はさらに複雑な様相を呈する。ナショナル・アイデンティティの形成は、つまりネーションにおける「我々イメージ (We-Image)」の形成である。多文化主義、多民族主義が進行しているオーストラリアでは、国民のメンタリティに、文化的に異なる様々な層が組み込まれており、複雑で重層的な我々イメージが形成されていることが想像される。民族のアイデンティティとそれを許容しないナショナル・アイデンティティの形成、また複数の民族のアイデンティティの結合から生まれたハイブリッド性を伴うナショナル・アイデンティティの存在、異なるフェイズから生まれるナショナル・アイデンティティとその裏での政治的駆け引きの存在、外部者には理解しがたいナショナル・アイデンティティを取り巻くオーストラリアの特殊な社会的背景とスポーツに関する課題をハリナン准教授の講演から読み取ることができた。

ジャクソン教授に対する質問において本学の村田准教授から、本来日本人のメンタリティ、ナショナル・アイデンティティと結びついていた柔道の精神性が、プロ化、ビジネス化によって揺さぶりをかけられ変質しつつあるという、同様のコンテキストから生じている我が国の問題も提示された。グローバルな波に浸食されつつあるローカル性や民族の独自文化が、国を超えて連帯できうる可能性をギデンスは主張した (ギデンス, 2001)。このシンポジウムに参加した多くの学生や教員にとって、こうした可能性を実感したり、他国において、その文化の根幹的な部分を担うスポーツの姿を体験できる機会になったと考える。

追記 両氏の講演のbackground paper は以下の通りである。

- ・ Jackson, J.J. and Hokowhitu, B., Sport, Tribes, and Technology: The New Zealand All Blacks *Haka* and the Politics of Identity, *Journal of Sport & Social Issues*, Volume 26, No. 2, 2002, pp. 125-139
- ・ Hallinan, C.J. and Krotee, M.L., Conceptions of Nationalism and Citizenship among non-Anglo-Celtic Soccer Clubs in an Australian City, *Journal of Sport & Social Issues*, Volume 17, 1993, pp. 125-133

引用文献

- 海老島 均, 2006, 「スポーツのグローバリゼーション, ナショナリズム」, 菊他編『現代スポーツのパーспекティブ』, 大修館書店
- アンソニー・ギデンス, 2001, (佐和隆光訳)『暴走する社会—グローバリゼーションは何をどう変えるのか』, ダイヤモンド社
- Maguire, J., 1999, *Global Sport, Polity*

謝辞

びわこ国際スポーツセミナー2008は、本学の国際交流委員会と学術委員会との連携の下、学内同研究費によって実現した。両委員会の構成員および関係教職員各位に深く感謝の意を表したい。

